

発掘調査の概要

藤原宮内裏東官衙地区・朝堂院東地区の調査

(飛鳥藤原第133-11次)

平成17年1月11日に標記の地区の発掘に取りかかりました。調査区の長さは135mに及び、広範な地区にまたがりますが、実はトレーナーの幅がわずか2mにすぎません。調査地は橿原市高殿町の集落西方70mのところを南へ流れる水路にあたります。素掘の水路を改修してU字溝を設置するという現状変更申請が持ち上がり、その事前確認調査のため、狭長な調査区となりました。調査区北端は内裏の南端東方、同じく南端は朝堂院東第二堂北半部東方にほぼ相当します。

今回の調査区両側はこれまで調査がなされておらず、この未調査区に長い試掘トレーナーを入れることになります。その結果、すぐ脇を走る市道路面下90cm前後のところで、藤原宮期と思われる掘立柱建物や掘立柱塀、石組の溝などが見つかりました。遺構の密度は低く、水路による削平のため遺構の残りもよくありませんでしたが、この地区の一端を窺うことができました。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 小池伸彦)

川原寺の調査 (飛鳥藤原第133-12次)

川原寺中金堂と講堂間の西側に位置する光福寺庫裏の建て替えにともなう事前調査です。平成17年2月2日に重機掘削を開始したところ、地表下40cmほどで巨大な礎石が顔をのぞかせました。上面は平滑で円形の柱座を造り出してあり、その直径は約1mもあります。これはこれまで発見された川原寺の中金堂や塔、南大門の礎石より大きなものです。このような礎石がコ字形に整然と6個並んでいました。建物全体では、南北が礎石4個分(3間)東西が礎石3個分(2間)と推定され、ちょうど建物の東半分にあたります。礎石中心間の距離はおよそ2.1m(7尺)。巨大な礎石ながら、その間隔が狭いのがこの建物の特徴の一つです。

この礎石の東方と南方には凝灰岩切石列があり、逆L字形に接続しています。これはこの建物の基壇(土壇)の縁を形成する地覆石で、礎石芯からの距離は2.7m(9尺)ほどあります。この距離(基壇の出)が大きいのが、この建物の2つめの特徴

です。ふつう日本の建物では、基壇縁が雨に当たらないよう軒をのばしますから、この建物は軒先が柱から2.7m以上出ていたことになり、柱上に複雑な木組み(組物)を備えた立派な建物と考えられます。

現存する法隆寺西院の建物や興福寺の遺跡を参考すると、位置的にみて、発見した建物は川原寺の経楼もしくは鐘楼でしょう。経楼とは寺の経巻を収蔵する建物、鐘楼とは梵鐘を吊る建物のことです。全国的にみても、このような経楼や鐘楼の発掘例はわずか十数件しかなく、しかも7世紀末に遡るのは、岐阜県飛騨市の杉崎廃寺くらいです。さらに川原寺のような高い格を誇った古代の国家寺院(官寺)では、その実態が明確ではありませんでした。今回の建物跡は、日本最古の経楼もしくは鐘楼の遺構であり、しかも官寺の良好な遺構が出土したこと、古代の伽藍建築のあり方を考えうえできわめて重要な発見と考えています。

以上のような発見の重要性に鑑みて、報道発表をおこない、2月22日には現地見学会を実施しました。調査区周囲に十分な見学スペースを確保できないため、東方に床高さ約1.5mの仮設足場を設置して見学者に供しました。平日にもかかわらず、約600人が訪れ、巨大な礎石に感嘆し、カメラにおさめていきました。調査担当者による説明は適宜おこないましたが、次々に押し寄せる見学者のため、朝9時前から午後4時までの解説は計14回に達しました。

さらに調査は継続しています。基壇上にある焼土層に多量の瓦が混じるため、創建以降の修復・改造がどれだけ及んでいるかなどが、解明すべき課題です。 (飛鳥藤原宮跡発掘調査部 箱崎和久)



川原寺の遺構(東南から)